

《書評》

Michael Y. Bennett, ed.,

Philosophy and Oscar Wilde

New York: Palgrave Macmillan, 2017.

Philip E. Smith II, ed.,

Oscar Wilde's Historical Criticism Notebook

Oxford: Oxford UP, 2016.

町本 亮大

現在のウォルター・ペイター研究は、大陸ヨーロッパの諸文化に関心のベクトルを向ける多言語使いの研究者たちにより主導されているかのような趣がある。イタリアに出自を持ち、現在オクスフォードで教壇に立つ Stefano Evangelista は、出身国と英語圏のほか、ドイツ、フランス、スカンディナヴィア諸国のあいだの文学的、文化的交流に関する比較研究に従事しており、次に予定されているモノグラフはヴィクトリア朝世紀末のコスモポリタニズムを主題とするものだろう。ワイルド全集に続いてこちらもオクスフォード大学出版会より刊行が始まったばかりのペイター全集のうち、*Imaginary Portraits* にあてられた第3巻の編者を務めるのはコペンハーゲン大学の Lene Østermark-Johansen、デンマーク語のネイティヴ・スピーカーである。そして同全集、*Marius the Epicurean* を収める第2巻の編者として予定されているのは、やはり北欧、ストックホルム大学で教える Giles Whiteley だ。

Whiteley は2010年に「ウォルター・ペイターとポスト・ヘーゲル主義」をテーマとする著作を発表し、2018年には、19世紀イギリス文学におけるシェリング受容を扱う著作がパルグレイヴ・マクミランより刊行されることが予告されている¹。予想されるように大陸哲学に通じた研究者だが、この著者が2015年に出版した *Oscar Wilde and the Simulacrum: The Truth of Masks* は、「オスカー・ワイルドと哲学」というテーマに取り組む最新の研究の一つである。ここで前面に押し出される哲学者はドゥルーズで、ポスト構造主義からワイルドを読む線のものだ。

イギリスの知的世界の島国根性に敵対したヴィクトリア朝の文化批評家たちが常に参照項としたのが大陸の哲学的伝統であった。コスモポリタン・クリティシズム——今から20年も前にワイルドと哲学というトピックに関するエレガントな研究を世に問うた Julia Prewitt Brown は、1997年に出版した小著をそう題した。この本に推薦の辞を寄せたハロルド・ブルームが書いているように、Brownの研究は「ワイルドをペイターの経験主義美学から引き離し、カントの批判的観念論のもとへ復帰させる」ものであった。

今度はそのBrownより推薦コメントをもらってきた論集が、2017年、パルグレイヴ・マクミランより出版された。 *Philosophy and Oscar Wilde* と題されたこの論集の編者を務める Michael Y. Bennett は、現在ウィスコンシン大学ホワイトウォーター校准教授。既にワイルド研究で名前を知られる研究者も寄稿する小ぶりの論集(索引まで含め全194頁)であるが、とはいえ本書の出版によっても、ワイルドと哲学というテーマに関心を持つ者が初めに手に取るべき一冊がBrownの *Cosmopolitan Criticism: Oscar Wilde's Philosophy of Art* であるというのはいましばらく動かないように思われる。

Bennettの論集は全9章から成る。編者によるごく短い導入は第1章としてあるものの、序章というよりほとんど前書きに相当する簡単なコメントと続く各章の概要紹介からのみ構成されるもので、実質的には全8章の論集である。前半4章は「ファクト」、後半4章は「フィクション」を扱うパートと区分けされ、前者はより descriptive な性質の強いもの、後者はより interpretive な性質の強いものとして色分けがなされている。以下、全体としてより質の高い「ファクト」のパートを中心に、各章についてみていき

たい。

第2章 ‘Wilde at Oxford: A Truce with Facts’ の著者は Simon Reader、現在彼はトロント大学の助教授である。冒頭に置かれた論考にふさわしく、最も本書のテーマに忠実なものになっている。というのも本論が扱うのは UCLA ウィリアム・アンドルーズ・クラーク記念図書館の所有する「哲学ノート」だからだ。現在 Joseph Bristow により出版が準備されている「哲学ノート」は、ワイルドがモードリンで学んだ1876年から78年のあいだ用いられたもので、*Oxford Notebooks* として出版されている二組のノートと比較すると、ここでワイルドはより少数の哲学者に集中的に取り組んでいる。そこで扱われるのは、第一にアリストテレス、プラトン、フランシス・ベーコン、次に頻度は下がるものの、J・S・ミル、ハーバート・スペンサー、カント、ヒュームである。とりわけベーコンの『ノヴム・オルガヌム』とアリストテレスの『ニコマコス倫理学』への言及に注目することで Reader が示そうとするのは、要するに、成熟期のワイルドは「事実的なもの」への敵対という態度でよく知られるけれども、このノートを取っていた時期の彼はそうではなかった、そこでは「事実」は「敵というより、ヴァイタリティの源」(Bennett, 17) として扱われていた、ということである。彼の論の妥当性については、ノートの出版以後、各研究者が本格的な検討に着手することが可能になるだろう。とはいえ Reader の議論、すなわちこのノートは「ワイルドがもし伝統的なタイプの哲学者になっていたならばどんなふうであったか」をおぼろげに示していて、その立場は「懐疑主義、認識論的多元主義」、そして「諸科学の反証可能性に意識的で、知識とは断片的に産出されるものだということを熱心に主張する」ような哲学者であっただろう、という彼の見立てには説得力があるように思われた(18)。この時期英米で影響力のあったヘーゲル哲学であるが、「絶対者」を中心に据える絶対的観念論は、個人を「絶対者」の表現としての役割に還元しかねないとして、しばしば後続の哲学者たちからの批判にさらされた。その結果、イギリスでは個々の人格的価値を重視する人格的観念論が力を持つようになり、アメリカではウィリアム・ジェイムズの根本的経験論、多元的宇宙といった発想が生まれてくる。イングランドで観念論の牙城であったベイリオルも、F・C・S・シラーというプラグマティスト(彼の用語法ではヒュー

マニスト)を生んだ。英米の観念論の歴史としてここまです視野に入れるとき、ワイルドは「個別性」の価値を称揚するこちらの流れにより親和性があるように評者には思えるのである²。

第3章は Philip E. Smith II による ‘Oscar Wilde’s Philosophy of History’ である。Smith は Michael Helfand とともに 1989 年に「オクスフォード・ノートブック」を出版した編者の一人で、そこで提示されたワイルドの歴史哲学に関する議論は、「物質主義的な進化理論とヘーゲル哲学の観念論的弁証法の総合」というワイルドの基本的モチーフがやはり「歴史批評」エッセイにおいても一貫してみられるというものであった(29)。Bennet 論集における Smith の論もあくまでそのテーゼを基礎により詳細な議論を提示することを目指すものである。本論は Smith が 2016 年に編者として世に出したばかりの *Oscar Wilde’s Historical Criticism Notebook* を前提としたものだから、このエディションについてもここで同時にみていこう。

Smith が編者として出版したノート(以下 HCN)は英国図書館 Hyde-Eccles コレクション所蔵のもので、「古代人の歴史批評」というお題が掲げられた大学のエッセイ賞(1879年)に応募するためメモと下書きを書き溜める目的でワイルドが使用したものである。結果として書かれたエッセイはワイルドの生前は未刊行であったが、ロバート・ロスが「歴史批評の勃興」というタイトルを付して全集第7巻(1908年)に収録した。その後「清書版」草稿をあらためて参照しつつロスの手の入った部分をオリジナルに戻した「決定版」テキストがジョゼフィン・ガイのエディション(OUP版全集第4巻、2007年)に収録されるが、ここでも HCN が参照されることはなかった。ガイのエディションが採用した草稿である三冊のノート——これらは 1895 年のオークションに出品されたものである——は判読が難しく、完成版とはみなしがたい部分が少なからずあって、そもそも最終的にワイルドが実際にエッセイ賞に応募したのかどうかも定かではない。HCN はこの草稿に先立つテキストとみることができる。

Smith によれば、単純に行数で数えてみて、エッセイの半分弱は HCN から引き写されたものだ。残りは HCN にソースのない文章で構成されていることになる。(Smith, xviii–xix 頁参照。Smith のエディションには、エッ

セイとHCNの対応表が補遺として付されている。)それゆえエッセイの執筆に際しHCNのほかにも参照したノートがあったのではないかとSmithは推測する。

*Oxford Notebooks*の序論における実践とは対照的に、Smithはこのエディションでは自分の「体系的解釈」(xxxiv)を提示するつもりはないと断りつつも——こちらの序論は全20頁!——、ワイルドがエッセイで最終的に使用しなかったHCNのエントリーで彼にとって興味深いと思われた箇所をいくつか挙げて説明していく。たとえばエッセイでは4行で簡単に用済みとされるタキトゥスは、元のノートにおいてはより慎重に検討されており、のちのワイルドのキャリアを知る者にとっては暗示的なことに、タキトゥスの「罪」に対する心理的興味なるものへの言及がなされている。ノートの原文をそのまま引用すれば、ワイルドを魅了したのはタキトゥスの‘psychological interest in crime what seems some say inherent in the Italian nature; it wd. be wrong to call it morbid for it is essentially intellectual and yet it is too analytical to be really healthy’であった(72 verso)——といった具合だ。またルキアノスに依拠して理想の歴史家について語るに際して、それは「文学におけるコスモポリタン」(73 verso)であるとワイルドが特徴づけるとき、のちの彼の批評観の萌芽が現れていると考えることができるかもしれない。(他の箇所にも二度、コスモポリタニズムへの言及がある。)かくしてヴィクトリア時代の歴史哲学にまつわる言説に関心を持つ者はいうまでもなく、ワイルド研究そのものにもやはり有用であることを示唆する序論となっている。

するとノートのエディションにおいては差し控えられたSmith自身の「体系的解釈」は、Bennett論集に収められた論文の中で披露されているのではないか、そう読者は期待をしたくなるだろう。たしかにエッセイを引用する際、HCNに対応箇所がある場合は必ず注でその頁数を示し、テキストの異同についてもときどき注で説明が加えられる。また細部に注目すれば、ジョゼフィン・ガイが特定できなかったもののノートを参照することで探し当てることのできたソースが紹介されることもある。たとえばワイルドのフィヒテへの言及。彼のフィヒテに関する知識はカーライルかペイターから間接的に学んだものだろうとガイが推測するところで、Smithはノー

トの記述から判断し、Robert Flintの*The Philosophy of History in France and Germany* (1874)をソースとして指摘する(とはいえあくまで知識が二次的なソースに依拠するものだというガイの推測は外れていないわけだ)。しかしこの論文の基調は、「ヘーゲリアン／スペンサリアンの」アプローチによって書かれた「歴史批評」エッセイのテキストそのものをふんだんにブロック引用しながら内容を丁寧に紹介するというものであり、著者のエディション作りの仕事がエッセイ全体の解釈ないしワイルドの全キャリアとの関連からいかなる重要な意義を持つものであったかということについての「体系的解釈」が提示されることはない。なにしろ本文中の「歴史批評」エッセイからの引用は全てガイのエディションに依拠するものなのだ。

論文の最後には‘History and Art: A Coda’と題された2頁から成るセクションが置かれている。キャリアの終わりにおいて、自らが時代の芸術と文化に対し象徴的な関係に立つ人間であると回顧的に宣言することに表れているように、終生「歴史」から逃れることのできなかったワイルドであるが、Smithの言うように、「歴史」も「芸術」同様、道徳的教訓を引き出すための言説として理解することはできないというワイルド的原理が最初に明言されたのが「歴史批評」のエッセイであった。論文の大部分を占めるエッセイの詳細な紹介との有機的な連関の見えにくい「コーダ」であるが、これが現在のSmith自身のワイルド研究において「歴史」が持つ重要性についての暫定的な答えということのようである。

最後に一言——邪推するに、Smithはノートに含まれる素材がいかにか「歴史批評」エッセイ全体の読解と関係するかについてのより「体系的」な解釈を、別のところのために取っておいたのではないだろうか? 「別のところ」とは2017年にオクスフォード大学出版会から出た論集*Oscar Wilde and Classical Antiquity*であり、Smithはここに寄稿した‘Wilde and Roman History’と題する論文で、ノートで詳しく展開されるもののエッセイではごっそり省略されたローマの歴史家たちに関する議論の重要性について論じているのである。

Bennett論集の他の論考に話を移そう。第4章は、1999年に出版された*Oscar Wilde: The Critic as Humanist*によってワイルド研究史に名前を残

す Bruce Bashford による論文、“Even Things that are True can be Proved”: Oscar Wilde on Argument’である。副題が示す通りワイルドが argument について考えた(であろう)ことを、20(～21)世紀のアメリカの哲学者であるヘンリー・ジョンストン(Henry Johnstone)とリチャード・ローティを引き合いに出しつつ、(Bashford自身認めるように)いくぶん conjectural に論じるものである。ワイルドとポストモダン哲学の関わりについて論じられてきたことを思い起こせば、ローティが比較の対象として持ち出されるのは意外なことではないだろう。ジョンストンについて評者は本論で初めて勉強することとなったが、その打ち出すテーゼを一言でいえば「哲学的議論は必然的に ad hominem [属人的なもの、議論そのものでなく人格に向けられるもの]である」ということらしい(Bennett, 58)。哲学的命題の客観的世界との照合を考えるのでなく、議論の発する源であるところの人格に注目する——そうするとワイルドとしばしば比較されるニーチェのことが想起されるし、西洋哲学史において反プラトニズム的／パースペクティブ的／修辞学的転回を推し進めたのが世紀転換期の思想世界であったのだから、この論考をヒントにより歴史的文脈に踏み入る形の議論を構想することも可能であるかもしれない。「推測的」とはいえ面白く読ませる一編であった。

第5章、Jerusha McCormack による ‘Oscar Wilde: As Daoist Sage’ は、ワイルドと荘子というテーマに取り組むもの。新しくも珍しくもないテーマではあるが、アイリッシュネスという観点に軸足を置きながら、10年にわたって北京外国語大学で研究と教育に携わってきた著者ならではの強みを活かした手堅い議論が展開される。たとえばワイルドがサンフランシスコのチャイナタウンを訪れた際に好意的に評した中国人労働者たちを、同国のアイルランド人労働者たちの置かれた境遇との連想において理解した可能性に言及するところには、最近の「アイリッシュ・ワイルド」研究において得られた新たな観点が反映されている。(とはいえ、荘子はこの論集の題材に含めるならば、「哲学」の範囲を際限なく拡大しなければならないように思わないでもない。この点について著者自身は論文内で弁解をしているが、そもそも「第1章」において編者の Bennett が、本書の扱う「哲学」が何であるのかについて説明を加えるべきではなかっただろうか?)

「フィクション」に関する残る4つの章はそれぞれ簡単な内容紹介にとどめたい。第6章、Melissa Knoxの‘*Homo Ludens: Oscar Wilde's Philosophy*’は、ワイルドの「真面目な遊戯」の哲学は、笑いを「真理へと到達する道」(124)とみなすものであり、「より最近の〔ポスト構造主義の〕批評家たちがアポリアの概念に回帰する」ところでワイルドは「つねにパーソナリティ——個人主義——そしてユーモアへ戻っていく」(121)と論じるもの。

第7章、S. I. Salamenskyの‘*The Figure of the Jew as Key to Oscar Wilde's Aesth-Ethos*’は、ワイルドのユダヤ人観、ワイルド作品におけるユダヤ人表象を問題化するもの。基本的にワイルドは手紙においても出版された作品においても同時代の偏見まみれの反ユダヤ的言説を反復していることが示された上で、著者は*Salome*に注目してユダヤ系の女性と男性の表象に差があることを主張しようとする。19世紀のユダヤ言説に関して情報豊富な論文ではあるが、いかに「哲学」と関係するのが判然としにくい。

第8章、編者Bennettによる‘*Wilde Thoughts on Philosophical Reference in An Ideal Husband: “An Ideal” versus “The Ideal” Husband*’は、哲学者のマイノング(Alexius Meinong)を批判してバートランド・ラッセルが著した‘*On Denoting*’(1905)で展開される議論を、ある意味でワイルドの喜劇作品が先取りしているというようなことをアクロバティックに論じるもの。

最後、第9章のKatherine O’Keefeによる‘*Oscar Wilde and G. F. Hegel: The Wildean Fairy Tale as Postcolonial Dialectic*’は、ワイルドの童話にヘーゲルの弁証法を持ち込みポストコロニアルな観点から読もうと試みるもの。著者はいまだ『精神現象学』の英訳もなかった時期に書かれた童話作品の読解に「主人と奴隷の弁証法」というあまりに有名な寓話を正面から持ち込もうとするのだが、こういう場合、ヘーゲル哲学(ないしそのポストコロニアルな変奏)によほど通暁しているのでない限り表層的読解にとどまらざるをえないのではないだろうか？

総じて、質にもテーマの方向性にもばらつきのある論集で、果たしてこれを通読した読者が「ワイルドと哲学」というのがseminalなテーマであるという感触を得られるかやや疑わしいように感じられた。本書が問題に

する「哲学」が何であるか編者が明確にしないために、この本の理念、輪郭がはっきりと見えてこない。むろん様々なアプローチがあってよいのだが、評者がとりわけ不満に思ったのが、これを通読しても、ヴィクトリア時代の知的世界における哲学の位置や役割、当時イギリスにおいて哲学といわれる営為に従事した人々の著作や生涯等々についての新しい情報や解釈がほとんど何も得られなかったことである。ヴィクトリア時代における哲学というのはまだまだやり残された部分の多い領域だ。「オクスフォード・ハンドブック」の19世紀イギリス哲学に充てられた巻の編者であるW. J. Manderがほんの数年前に(やや誇張気味に?)書いたように、「英語圏の大半の哲学史家にとって『19世紀哲学』という表現は、イギリスの伝統ではなく大陸思想の偉大なる諸体系——ヘーゲル、キルケゴール、ショーペンハウアー、ニーチェ——を意味するもので、ミルやニューマンといった個々の事例を除けば、イギリスの伝統は現在に至るまでほとんどまったく知られていない」のである³。遠回りのように思えても、ヴィクトリア朝の哲学という包括的なテーマに取り組むつもりで大小いろいろな哲学者、思想家をあれこれみていくうちに、意図せずワイルドを読む新しい視野が開けてくる——そんな可能性に賭けてみるのはどうだろう？

注

- 1 *Aestheticism and the Philosophy of Death: Walter Pater and Post-Hegelianism* (Oxford: Legenda, 2010); *Schelling's Reception in Nineteenth-Century British Literature* (forthcoming with Palgrave Macmillan, 2018).
- 2 数少ないシラー論のうち、Admir Skodoの'Eugenics and Pragmatism: F. C. S. Schiller's Philosophical Politics', *Modern Intellectual History*, 14.3 (2017), 661-87 (p. 665)が後期ヴィクトリア朝とエドワード朝における「eccentricityの文化」という文脈でオスカー・ワイルドの名に言及している。
- 3 W. J. Mander, 'Introduction', in *The Oxford Handbook of British Philosophy in the Nineteenth Century*, ed. by Mander (Oxford: Oxford University Press, 2014), p. 1.